

原爆文学研究会報

第五八号

原爆文学研究会二〇一九年六月

震災後の福島県で刊行された文芸同人誌調査の中途報告

加島 正浩

私は「東日本大震災以後の現代文学」をテーマに博士論文を準備中の身なのだが、準備の一環で福島県の文芸同人誌の調査を行っている。そして末尾の表の通り、現在のところ二十八種類の同人誌の発刊を確認している。

現時点での調査の成果は一度研究発表で報告したが、「被災を書く」ということ―東日本大震災以後の福島県の文芸同人誌活動概説¹立教大学・名古屋大学合同研究会、二〇一九年三月十四日、於立教大学）具体的な内容は短期間の調査を複数回行った後、複数の論文にわけて報告する予定である。そのためここでは簡単に調査の途中経過を報告したい。

福島県は阿武隈高地と奥羽山脈によって三区域に区分けされており、東から浜通り、中通り、会津と呼ばれる。その三分に基つき、文芸同人誌の発行地域を末尾の表のように示している。ただし表記は発行所、発行人の居住区域に基づいているため、執筆者全員が記載地域に居住しているとは限らない。

特に『桔槔』、『はららご』、『青環』のように歴史ある大規模な結社は同人・会員ともに福島県外からの参加も多い。俳誌『桔槔』の歴史は古く、日本現代詩歌文学館に一九二六年五月（五巻五号）の所蔵があることを確認した。また現在まで月刊で刊行は続いており、二〇一九年四月号まで発刊を確認している。なお俳誌『はららご』は一九九二年八月に創刊された季刊誌で、七六号（二〇一一年七月）から八二号（二〇一二年十二月）まで東日本大震災特集を組んでいたが、代表八牧美喜子氏の死去により九五号（二〇一六年十二月）にて終刊している。また歌誌『青

環』は一九五四年八月に創刊された季刊誌で、確認できている最新号は第六四巻第四号（二〇一八年十一月）である。

ただし刊行されている文芸同人誌は上記の結社のような大規模なものばかりではない。たとえば毎月十頁程度ではあるが刊行を続けている『関の森文庫』（『関の森』から改題）などもある。また書き手も多様であり、福島大学名誉教授の木村幸雄氏が主宰し、彼の教え子を中心に木村氏が亡くなった後も刊行を続けている『駱駝の瘤・通信』や、現役の大学院生が多数参加する『雛嚙粟^{コケリコ}』などアカデミズムのトレーニングを受けた執筆者を多数持つ同人誌もあるが、『熱気球』のようにラーメン店を営む店主が参加しているものもある。

そして多くの文芸同人誌は同人や知り合いに配布し、図書館や文学館へ寄贈することで配本が終わることが多いように推測されるが、『福島自由人』のように民報印刷の書籍販売サイト「ジュンコ堂書店」(<https://www.p-minpo.co.jp/junkodo/>)で購入できるものや、ヤマニ書房・鹿島ブックセンターなどの刊行元近くの本屋に卸し、購入できるようになっている『風舎』など現物を手に入れやすいものもあり、流通のあり方も多様である。

同人誌の刊行点数も多く、内容・書き手・流通・刊行の目的など様々な点で多様である文芸同人誌の調査内容を未だ丁寧に整理することができておらず、今後ひとつひとつ行おうが、まずは福島第一原発に近い浜通りで刊行されたものから手をつけていきたい。特に原発事故後も多くの会員が南相馬市に居住する『あんだんて』や、多くの会員がいわき市に住む俳誌『浜通り』、同じくいわき市に在住する高木佳子氏が発行する個人誌『壘』などは原発事故と事故後の生活に触れつづけており、整理

では、本研究会の会員で、二月二二日に亡くなられた加納実紀代さんに献杯が捧げられました。

◇研究発表

放射能汚染、反核運動、被爆者

——21世紀ヒンディー語小説『マラング・ゴダニルカー
ントファ』を巡って

モハンマド・モインウツディン



この研究は、核に関わる世界の文学を調査し、ヒロシマ・ナガサキの扱い方を検討することを目的としている。ただし、直接ヒロシマ・ナガサキの原爆投下についてはなく、ウラン鉱山、核実験場、原子力発電所など核に関わる場所にまつわる海外の文学でヒロシマ・ナガサキが回想される描写を検討する。今回は、インドのウラン採

鉱とその放射能汚染による被害を中心に書かれた文学作品を取り上げて考察を試みている。二〇一二年にインド、デリーから出版された長編小説『マラング・ゴダニルカーントファ』（マファ・マジ著）においては、東インドのジャールカンド州のジャドゥゴダという地方にあるウラン鉱山の地域が舞台となっている。東インドの先住民族（アディヴァシー）による運動や反核運動などは、本作品の主なテーマとなっている。他方作者は、ウラン被曝者の無知について語り、採鉱に関わっている会社や政府の無責任さをうかがわせる。インドのウラン採鉱の歴史、放射性物質による被害などについて描かれているだけでなく、日本の原爆をはじめアメリカ、オーストラリアなどのウラン鉱山や原子力発電所などにも

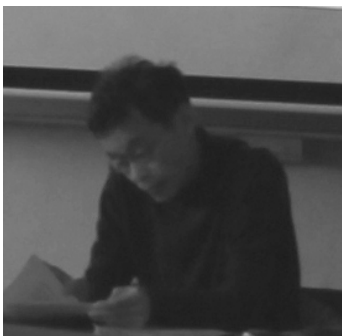
言及されている。そして、ヒロシマ・ナガサキの被爆者とウラン鉱山、原子力発電所事故の被曝者は同等に扱われている。作者はインドの一方の人々の被曝の苦しみに光を当て、それを小説の形で世の中に紹介した。そうすることによって、政府の文書や科学論文の中にとどまってしまうかも知れない被曝者の苦しみを多くの読者に伝え、それを歴史的な文脈の中でヒロシマ・ナガサキとうまく結びつけることに成功したと言えよう。インドの一方の問題をそこだけにとどめず、国際的・歴史的な視野の中でとらえ大きなスケールで描き出したことが、この作品の価値をいっそう高いものにしたと考えられる。

◇研究発表

戦後佐世保における核の「軍事利用」と「平和利用」

——原子力船「むつ」の受け入れ騒動を中心に

東村 岳史



福島第一原発事故後、核の「軍事利用」と「平和利用」の関係を問う研究は一時期一気に活性化した。その中で、被爆地と「平和利用」の関係を皮肉な形で示すものとして注目を集めたのが、一九五五年に広島で開催された「平和利用博覧会」であった。ただ、広島で博覧会が開催された一方で、長崎では同時期同種の催し物は開催されなかったため、長崎と「平和利用」の関係は広島ほどには注目を浴びなかったような印象を受ける。

しかしながら、長崎が「平和利用」論争と無縁だったかといえば、まっ

たくそんなことはない。長崎で核の「平和利用」論争がもつとも激しく戦わされたのは、原子力船「むつ」の佐世保港への受け入れをめぐる一九七〇年代中盤以降のことである。博覧会は短期的・一時的なイベントであるが（広島記念館での展示は長期に渡ったが）、長崎の方がより具体的・長期的な影響を被ったといえる。

本報告では、「むつ」の受け入れに先立ち戦後佐世保に原子力潜水艦や原子力空母が入港するようになった経緯に遡及し、その際の核の「軍事利用」と「平和利用」の境界線がどのように引き直され、また受け入れの正当性がどのように主張されてきたのかを考察した。国策に従った原潜や原子力空母の受け入れとは異なり、原子力船「むつ」の場合は「迷惑施設」の受け入れとその「見返り」という政治取り引きの側面が前景化された。つまり、核の「軍事利用」「平和利用」をめぐる論争に加え、地域振興や地方自治の問題が密接に絡んでくる。そして「被爆県」長崎という地域柄、反対する陣営には被爆者に加えて非被爆者も参画する一方、賛成側は経済界を中心とした非被爆者が受け入れを推進、両者は対立した。

また、「むつ」騒動が起こった一九七〇年代は原発に関する反対運動も活性化した時期でもあった。「むつ」に反対する人たちの中には、同じ原理の原発にも反対すべきであるという立場を明確にした人もいた。ただ、結局「むつ」は佐世保に入港し、修理を終えて出港した後、論争は終息する。「むつ」は廃船となったものの、その後原発が何を引き起こしたのかはいまでもない。戦後における核の「軍事利用」と「平和利用」、さらに関連する地域振興等の問題を考えるとき、佐世保の騒動は多面的な論点を提示する事例として現在でも参照に値する。

機関誌「原爆文学研究」第一八号原稿募集

本研究会が年に一回発行している機関誌「原爆文学研究」の一八号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載します。奮ってご投稿ください。

○書式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿で投稿の場合は二〇一九年九

月中旬、データファイル（Wordか一太郎）を添付して投稿の場合は同年九月三〇日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁（機関誌の書式）につき、一〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八八〇―八五二〇 宮崎市船塚一丁目一―二

宮崎公立大学人文学部 楠田剛士研究室

彙報

第五八回原爆文学研究会

○日時 二〇一九年三月三十一日（日）

○会場 広島大学東千田キャンパス東千田校舎A棟一階共用講義室

○研究発表

放射能汚染、反核運動、被爆者――21世紀ヒンディー語小説『マラン
グ・ゴダニルカーントファ』を巡って

モハンマド・モインウツディン

戦後佐世保における核の「軍事利用」と「平和利用」

――原子力船「むつ」の受け入れ騒動を中心に

東村 岳史

編集後記

新しい元号となりました。ただ、本会では多くの場合、西暦が用いられてきたように記憶しています。おそらく原爆や核の問題を、元号が用いられる日本の文脈から切り離し、広く捉えようと努めてきたことの証しでありましょう。元号を使うか西暦を使うか、もちろん個人の自由ですが、坪井秀人さんが「僕が元号を使わない理由」(『日文研』60号)で書いているように、「眼前の風景から消えた日の丸や君が代、そして元号の内面化が企まれている」のだとしたら、背筋がゾツとします。

話は変わりますが、四月から第三期の世話人として新たに加島正浩さん、堀本嘉子さん、柳瀬善治さんが加わりました。よろしくお願いいたします。

代表世話人 川口隆行

事務局長 中野和典

世話人 岡村幸宣

堀本嘉子

加島正浩

楠田剛士

坂口博

長野秀樹

柳瀬善治

山本昭宏

李文茹

野坂昭雄

今回の第五九回原爆文学研究会は七月二七日(土)・二八日(日)に、前回と同じく広島大学東千田キャンパス東千田校舎A棟一階共用講義室にて開催されます。遠田憲成さん、平野裕次さん、小林朋子さんの研究発表、TVドキュメンタリー『原爆が遺した子ら』の上映会と東塚磨さん、大牟田聡さん、平尾直政さんによるコメント&アフタートーク、さらに「原爆文学」再読の7回目では青来有一『爆心』を取り上げ、楠田剛士さん、畑中佳恵さん、四條知恵さんに問題提起をしてもらいます。

盛りだくさんの内容で、充実した二日間になると思いますので、みなさま奮ってご参加ください。

(野坂昭雄)

発行元

原爆文学研究会事務局

〒八一四―〇一八〇福岡市城南区七隈八一―一九―一

福岡大学人文学部中野和典研究室内

tel 092-871-6631 (代表)

e-mail nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>